The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三島由紀夫　魅せられる精神
Author(s)	柴田, 勝二
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44448
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【34】

氏　　名	柴　田　勝　二（しばた　しょうじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17262　号
学位授与年月日	平成14年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学　位　論　文　名	**三島由紀夫　魅せられる精神**
論文審査委員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　内藤　　高　　助教授　飯倉　洋一

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、「第一部　「投身」の運動」、「第二部　超越と魅惑」、「第三部　＜天皇＞の表象」、「第四部　輪廻する霊魂――『豊饒の海』」からなる。各章4節計16節からなり、およそ36万字（四百字九百枚）である。

従来の三島研究について、「生活者としての相貌の把握を、作家の理解に対する強力な条件とする姿勢である」と捉える。「作品世界の把握」については「人工的な美の世界を構築したといった見方で捉えるのが通例」で「現実との距離のなかに身を置き、そこから高踏的な眼差しを人間世界に投げかけようとするイロニーであるとされがちであった」とする。それに対して、「ほぼ世に出された順に作品を論じていく」過程で「本質的な要件として浮上してきたものが、何ものかに魅せられてしまう三島の人物たちの心性」であるという。その視点は、最終節で、最初の節で論じた、処女作的作品の『花ざかりの森』の終結部と最終作『天人五衰』の終結部との「類縁」を指摘するまでに至っている。「何ものかに魅せられてしまう」ということについて、「没我的な魅惑において立ちあらわれる、主体の昂揚と希薄化こそが」、「三島的なイロニーにほかならない」とするところに本論文の中軸があり、従来の三島論と画期をなそうとする狙いがある。

第一部では、『花ざかりの森』を三島の＜原形＞としての位置付けを示し、『中世』では、「＜終末＞の意識のなかで現実世界への志向が前面に押し出され」ることを指摘する。『盗賊』についても、その視点は踏襲されている。『仮面の告白』については、「＜同性愛者＞の他者性のなかに自己を投げ入れる」「私」が「＜告白＞の枠組みによって」「意識的に外部世界に」自己を投げ出しているとし、「執筆時の三島」の意識に迫ろうとする。

第二部は、三島の「自己と外界との関係性が」揺らいでいる時に、「自己を確保する問題に向き合う」試みとしてなされたという視点で、『愛の渇き』や『青の時代』などを論じている。また、『禁色』については、「投身」が可能であったかどうかという視点から、主要な二人の人物の優位性を見かけとは逆転させる読みを提示している。『潮騒』では、新治を「何ものかに魅せられ」る人物の系譜と捉えつつ、＜太陽＞と＜海＞の機能から、対米従属から＜日本＞の＜救済＞へとつながる存在として把握する。『金閣寺』では、「極言すれば」、「手記は溝口ではなく柏木によって書かれたもの」とも言えるとして、「精神の憑依的な浸透」を指摘し、金閣寺の焼失について、米国からの自立の困難をも表出する「執筆時の三島の現実意識」を見る。

第三部では、「戦時下から終戦時にかけての「崩壊」の時代を、距離をおいて眺めることが可能になった時点で生れた」とする作品群を論じる。『鏡子の家』では、「現実世界に直接相渡るものではない」、「ニヒリズムの超克に向かう」、「三島の戦略」を読みつつ、少女の造形に、「子供」としての日本と、天皇を「自己の世界に召還しようとする」

三島の意志を指摘する。『サド侯爵夫人』では、「荒ぶる魂」の観点から「サドと昭和天皇を重ね合わせる視点」を指摘する。

第四部では、『豊饒の海』については仏教的色彩よりも神道色が濃いことを指摘しつつ、『天人五衰』の結末に「転生のロマン性に対するペシミズムの背後に、作者三島の現実に対する失望」を指摘する。

論文審査の結果の要旨

論者が「投身」という言葉に注目するように、取り分け初期の作品においてこの言葉が作品の枠を越えて多用されている事実もあり、筆者の着眼は十分に評価されてよい。既成の議論にこうする姿勢は揺るぎないものとして貫かれている。しかも各時代における三島を貫流するものとして多方面に渡る作品を解読する姿勢は瞠目されるものである。こうした観点でそれぞれの作品を論じるにおいて、先行の論文への目配りは当然のこととして、ドイツ・ロマン派、西田幾太郎、ウィリアム・ジェームズ、ジョルジュ・バタイユ、ハイデッガー、ニーチェ、ラディゲ、あるいは『日本書紀』、『伊勢物語』、近松、西鶴、秋成、『舞姫』、折口信夫、山崎正和などを初めとして、歴史的資料や宗教をめぐる議論なども幅広く参照するなど、視野の広さも特筆されてよい。また、作中人物の年齢設定や、事柄の年代設定と 2.26 事件などとの関連の指摘や太陽を介してギリシアと伊勢の親近性の提示、固有名詞の寓意性の指摘など新しい見解の提出も少なくない。

ただ、「ほぼ世に出された順に作品を論じていく」という方法がもたらす、一面性についてもう少し意識的であってもよいのではないか。常に一つの方向で作品の生産がなされていくのか、時代状況が濃密に作品に影響するという視点が全面的に保証されるのかどうか。先行論文とは観点が違うものの、実生活の援用に依拠する部分がどこまで有効か。筆者自身があとがきで記すように、いくつかの「重要な作品に触れることができ」なかった、その事情が何であるのか。物理的な問題であるのか、本質的なものであるのか、言及がないのも残念である。短縮小説の実態について、本論文の視点で覆いきれるかどうか、疑問点も残されている。批評と研究の間という問題も意識させるところがある。

しかし、明確な視座に貫かれた重厚感のある論文の集成として、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。